

# 花の咲く前

小川未明

青空文庫



赤い牛乳屋の車が、ガラ、ガラと家の前を走っていきまし  
 た。幸吉は、春の日の光を浴びた、その鮮やかな赤い色が、い  
 ま塗りたてばかりのような気がしました。それから、もう一つ  
 きのついたことは、この車がいってしまったてからまもなく、カチ、  
 カチという拍子木の音がきこえたことです。昨日もそうであつ  
 たし、一昨日もそうであつたような気がするのです。  
 「不思議だなあ、牛乳屋の車と、紙芝居のおじさんと、ど  
 うして、いつもいつしよにくるのだろうな。」と、ブリキ屋の店

から、外そとを見ていた幸吉こうきちは、思おもつたのでした。

紙芝居かみしばいは、今日きょうも、赤トラあかのつづきをやるにきまつています。

赤トラあかの話はなしは、なかなか長編ちやうへんなんでした。おじさんはじめ、

子供こどもたちは、みんな赤トラあかを悪わるいねこだといつていましたけれど、

幸吉こうきちは、心こころの中で赤トラあかに同情どうじようしていました。なぜなら、

もとをいえば人間にんげんが悪わるいからです。三びきの子こを産うむと、一び

きは、近所きんじよの子供こどもが追おいかけて、どぶの中なかへ落おとしたし、一び

きは、だれかが連つれていってしまったし、もう一びきは、車くるまに足

をひかれたので、母ははねこは、そのたびに悲かなしんで気が狂くるいそうに

なり、ついに仕返しかえしをしようと決けつ心しんするようになりまし。赤あか

トラは人ひとの家うちへ入はいり込こんで、はじめのうちには、金魚きんぎよをとつたり、

カナリヤを食べたり、お膳ぜんについているお魚さかなをさらったりしたく  
 らいのものですが、だんだんいたずらが募つつて、赤ん坊あかぼうをひつか  
 いたり、お嬢じょうさんの手提てさげを失なくしたり、取り返としのつかないこと  
 をするようになりました。しまいには、「赤トラあか」と、きくと、  
 みんなが震ふるえあがるようになりました。

中なかには、槍やりや、鉄砲てつぽうを用意よういしておいて、きたら退治たいじしてやる  
 うと待ちかまえているものもありましたが、神通力じんずうりきを得えました  
 赤トラあかは、なかなか人間にんげんの目めには入はいりませんでした。

いつ忍しのび込こんできて、いつそんないたずらをするかわからない  
 ので、まったく悪魔あくまのしわざとしか思おもわれなくなりました。町まちの  
 人ひとたちは、夜よるになると心配しんぱいでろくろく安眠あんみんはできなかつたの

です。

ここにK技師ケーギシという、若い発明家はつめいかがあつて、赤トラあかの話はなしをきくと、たいそう腹はらを立てたました。

「世間せけんを騒さわがせる悪いねわるこだ。いかほどの神通力じんずうりきがあるにせよ、かがくちから科学の力にはかなうまい。私わたしが退治たいじしてやろう。」と、電気でんきを応お用うようして、いよいよ、赤トラあかと勝負しょうぶを決けつすることになつたのです。

ここまでは、幸吉こうきちが見みた、話はなしのあらましでありました。

「きようは、どうなるだろうか？」

彼かれは家うちにじつとしていられませんでした。ちようど叔父おじさんが、店みせにいなかつたので、幸吉こうきちは、酒屋さかやの前まえの空あき地ちの方ほうへ走はしつて

いきました。

二

子供たちは、空き地に積んである砂利の上へ登ったり、空き箱の上うえにすわったりして、紙芝居のおじさんを取り巻まいていました。自転車じてんしゃの上うえの小さな箱はこの舞台ぶたいの中には、見覚えのある赤トあかラの絵えがでていました。七、八人にんも子供こどもがあめを買かわなければ、おじさんは、説明せつめいをはじめないのが常つねでありました。「まだはじめないかなあ。」と、待まちくたびれて、いつこもどももありません。

自転車に乗って、そばを通りかけた小僧が、わざわざ自転車を止めて、子供たちの中にまじって、おじさんの説明をきこうとしているのも見受けられます。

茶色の古びた帽子を斜めにかぶった、口ひげのあるおじさんは、なんとなくずるそうな目つきをして、自分のまわりに立っている子供たちの顔を見まわしました。そして、心の中で、いつもくる子供たちがみんな集まったかと、一人一人の顔をしらべているようにも見られました。おじさんは、いつも買ってくれる子供達の顔は、よく覚えているのでしよう。そして、その中に幸吉が立っていると、おじさんの、そのずるそうな目つきは幸吉の顔の上に止まりました。おじさんは、幸吉にさも皮肉そうに、

「おまえ、このごろ買わないな。」といいました。幸吉が、いつも汚らしいふうをしていたからでもありません。また、めつたにあめを買わないので、紙芝居のおじさんにとって、けつしていい得意でなかったのも事実です。

しかし、幸吉は、みんなの前で、こんなことをいわれていい気持ちはありませんでした。彼は、だまって、ただ顔を真っ赤にしているには、もつと勇氣がありました。また、そんなことをいわれる理由もないように感じました。彼は、おじさんに向かって、「買いたくないから、買わないのだよ。」と、きつぱりといいました。彼は、すくなくも侮辱に対する仕返しをしたように、小さな肩をぐつと上げたのです。

「ふん。」と、おじさんは、いったきりで、あつちを向むいてしま  
いました。

「そんなこと、どうでもいいから、早はやくおはじめよ。」と、一人ひとり  
の子供こどもが叫さけびました。

「もうすこし待まちな、いまは始めるから。」と、おじさんは、お  
客きやくの氣きを損そんじまいとしました。

幸こう吉きちは、いつまでも立たつていてお話をはなしきこうとはしませんで  
した。独ひとり、みんなからはなれて、あちらへ歩あるいていきました。  
彼かれの心こころの中なかは、なんとなくさびしかつたのです。

黒くろい常と磐わぎ木の林はやしがあつた、その下したへきました。じきに花はなの咲さ  
季節きせつだつたけれど、ここだけは、まだ冬ふゆが残のこつているように風かぜが

冷たかつたのです。彼は、この冷たい風が、かえつて、哀しい自分の胸にしみるように、いつまでもここにいて、風に吹かれていたい気持ちがありました。足音がしたので振り向くと、こちらへ駆けてくる女の子の赤いたもが見えました。

「幸吉さん、早くいらつしやいよ。私お金を持っているわ。」と、日ごろから親しいみつ子さんが、いいました。みつ子のお父さんは、大きな会社に勤めているとかで、みつ子は、いつも幸福そうでした。けれど、幸吉には、そのことが、なんの關係もなかったのです。

「みつ子さんが、きけばいいじゃないか。」と、幸吉は、白い目で、みつ子の顔を見ました。

「あんたもいらつしやいよ。」

みつ子は、独りはなれていった幸吉を心の中で気の毒に思つたので、追いかけてきたのです。

あちらでは、おじさんのおもしろそうに声色を使っているのが、きかれました。

「僕、きかなくていいんだよ。」

幸吉は、このうえ、自分を連れていこうとするのは、自分に降伏させるものだと思つたので、つい怒り声を出したが、しまいにはそこにいたたまらなくなつて、またあてもなく駆け出していきましました。

幸吉こうきちが店みせへ帰かえると、仕事場しごとばに立たっていた叔父おじさんは、さも手て柄がら顔がをして、

「ジャツクの奴やつ、うまく物置ものおきへ入いれて閉しめてしまった。いまに犬殺いぬころしがきたら引ひき渡わたしてくれるのだ。」といいました。幸こうきち吉きちは、これをきくと、どきつとしました。なにか真まつ黒くろな手てで胸むねを押おさえつけられたような気味悪きみわるさを感じかんじました。「赤あかトラ」  
の話はなしに強つよく心こころを惹ひかれたのも、このジャツクという年老としおいた不幸ふこうの野犬やけんのことが、たえず頭あたまの中なかにあつたからでした。叔父おじは、ど  
ういうものかジャツクを心こころから憎にくんでいるのです。それにはた

いした理由があるのではなく、ただこの哀れな黒い毛の汚れた老犬を見ると、むらむらと憎くなるというふうでした。幸吉は、それを怖ろしいことのように思いました。幸吉は、あるときには、たまりかねて、叔父さんの顔を見上げながら、「叔父さん、ジャックをかわいがっておやりよ。かわいそうじゃないか。」といいました。

「どういうものか、あいつはきらいでな。ひどいめにあわせてくれなけりや。」と、叔父は、金づちを手握って、きたら投げつける身構えをしていました。

「なにも悪いことをしないじゃないか。」と、幸吉は、つくづく叔父さんの顔を見て、どうしてこの哀れな犬だけに無情なこ

とをするのだろう、ほかの犬には、やさしくしてやるのにと思つたのでした。

「あいつが、植木鉢に小便をかけたし、いつかくつが片方失くなったのも、きつとあいつがどこかへくわえていったのだ。」と、叔父は、答えたが、なんの理由もつけずにいじめるのは、自分でも気がとがめるからだ、幸吉には、思われました。

しかし、いまはそんなときでない。ジャックが物置の中に入られ、戸を閉められたときいては、じつとしてはいられなかつたのです。

「なんで物置の中へ入つたのだろうな。」と、幸吉は、あの年を取つていてもりこうで、敏捷な犬がと不思議に思いました。

た。

「犬殺しに追われてきたんだ。逃げ場がないので、物置の中

へ隠れたのだよ。」と、叔父は、ところもあるうに、おれの家の

物置の中へ隠れたのが、あいつの運の尽きだったと、せせら笑

いをしていました。幸吉は、またかわいそうに、自分が平常ジ

ヤツクをかわいがつてやるものだから、助けてくれると思つて、

家の物置にきて隠れたのだ。もし、このまま犬殺しに引き渡

してしまつたら、ジャツクはどんなに自分をうらむかしのれない。

よし、助けてやろうと、決心しました。

あちらで、しきりに犬の遠ぼえをする声がしていました。犬

殺しが近づいてきたのを警戒して、仲間知らせているので

す。幸吉は、すぐに裏手へまわりました。彼の足音をききつ  
けると、暗い物置の中から、訴えるように、すすりなく犬の悲  
鳴がしました。

「ジャツク！ 早く遠くへ逃げろ。」

幸吉が、戸を開けると、黒犬は、弾丸のように飛び出し  
て、叔父さんが、仕事をしている店先のブリキ板を蹴散らして、  
路次を抜けて原っぱの方へ逃げていったのです。

「ばかやろう、なんで犬を出したのだ！」と、叔父さんは、幸  
吉の頭をなぐろうとしました。幸吉は、手の下をくぐって、  
自分も犬の後を追って逃げたのであります。

しかし、ジャツクの姿は、どこにも見えませんでした。彼は、

町まちを離はなれたさびしい原はらっぱの中なかに立たつて、口笛くちぶえを鳴ならしました。どこへいつてしまつたか、ジャックはやつてきませんでした。いつも、こうして口笛くちぶえを吹ふけば、遠とおくからききつけて、駆かけてきたものです。彼かれは、家無いえなしのジャックを思おもうと、心こころの中なかが悲かなしかつたのでした。

幸吉こうきちは、しばらく茫ぼう然ぜんとして、考かんえながら立たつていました。あちらに見みえる高たかい煙えんとつ突つは、町まちのお湯屋ゆやか、それとも工こう場じようの煙えんとつ突つらしく、黒くろい煙けむりが早そう春しゆんの乳ちち色いろの空そらへ、へびのよう  
にうねりながら上あがつていました。

「あ、田舎いなかの家うちへ帰かえりたいな。」

幸吉こうきちは、自分じぶんには、帰かえる家うちがあるのだと思おもいました。そう思おも

うと、しみじみと故郷こきようの村むらが恋こいしくなりました。

#### 四

ジャックは、森もりの中なかへ深ふかく入はいつてゆきました。彼かれの後あとからは、  
 びつこの白しろいぬ犬ぬと、耳みみの垂たれた斑まだらいぬ犬ぬがついていきました。そ  
 して、たがいにジャックの右みぎになり、左ひだりになりして、ジャックの  
 身みを護ごえい衛いするようちゆういぶかに注ちゆういぶか意いぶか深せんぼうく先せんぼう方ほうを見みつめていました。すぎ  
 や、松まつの木きのしげつた森もりの中なかにはところどころ日ひの光ひかりが、にじの  
 ごとく洩もれて下したのささの葉はを明あかるく照てらしています。ここまでは  
 彼かれを追おつてくるものがありませぬ。野やけん犬けんの一群ぐんは、ジャックを中ち

ゆうしん  
 心にして、自分たちの生活せいかつ いとなを営むいとなことにしました。彼らは、  
 どこへいくにも一ひとかたまり塊かたまりとなつて、いつでも敵てきに当あたる用意よういをし  
 ていました。犬たちの間あいだにも、戦たたかつて弱よわいものは、強つよいものに絶ぜ  
つたい対たいに服ふくじゆう従じゆうするというおきてがあつて、夜よるになると、どこか  
 の飼かい犬いぬが、畜ちくけんひよう犬票けんひようをチャラチャラと鳴ならしながら、牛うしの骨ほね  
 や、パンくずなどをくわえて、彼らの機嫌きげんを取とるべく森もりの中なかへ持も  
はこち運はこぶのもありました。

ある日ひ、幸吉こうきちは、ジャツクのことを思おもい出だしました。

「ジャツクは、どうしたろうか。」

往來おうらいへ出でると、紫むらさきいろ色いろの美うつくしい着物きものをきたみつ子こが遊あそんで  
 いました。日ひの光ひかりの中なかに、ぱつと花はなが咲さいたように、道みちの上うへまで

がまぶしかつたのです。

「みつ子さん、赤トラはどうなった？」

幸吉は、このごろ、カチカチという拍子木の音をきいても、いくことがなかったのです。

「とうとうK技師に、電気で殺されちゃつたのよ。」

「かわいそうだね。」

「だって、赤ん坊をひつかいたり、人間にかみついたりするんですもの、しかたがないわ。」

「どこかへゆくのか？」

幸吉は、みつ子にたずねました。

「叔母さんがいらして、お母さんと三人でお買い物に行くの。幸

うきち

吉さんにお土産を買ってきてあげるわね。」と、みつ子は、

つちりとした黒い目で幸吉を見ました。

「みつ子さん、もう僕、晩にいないかもしれない。」と、幸吉

は、じつとみつ子の顔を見返すと、みつ子も、ちよつと驚いた顔

つきをしたが、すぐにいきいきと笑つて、

「そんなことうそよ、だましたつて知っているわ。」と、くるり

と彼方を向いて、駆け出していききました。げたについている鈴の

音が、リンリンと幸吉の耳にきこえました。

軽気球の上がつているであろう、遠い町の空はかすんでいま

した。こうして耳をすますと、大海原の波音のように、ある

いは、かすかな子守唄のように、都会のうめきが、穏やかな真

昼ひるの空くう氣きを伝つたつてくるのです。幸こう吉きちは、原はらつぱへいったが、原はらつぱには、だれも遊あそんでいませんでした。丘おかの木こ立だちは、みんなうす紅あかく色いろづいていました。あちらの高たかい煙えん突とつからは、今日きょうも黒くろい煙けむりが上のぼつていました。幸こう吉きちは、その煙けむりをみ、明日あすも、明後あさ日つてもまたこのように立たち上のぼることであるうと思おもつたのです。

まだ霜しもで枯かれたままになっている、草くさ株かぶの上うえへ腰こしを下おろすと、黄色きいろな小ちいさいちようが、風かぜに吹ふかれて目めの前まえを飛とんでいきました。幸こう吉きちは、年としちやんや、正しょうちやんたちと、ボなールを投なげて遊あそんだ去年きよねんの秋あきの日ひのことを思おもい出だしていました。

このとき、突とつ然ぜん後うしろ方かたから、飛とびついて幸こう吉きちの頭あたまを抱かかえたものがあります。

「あつ、ジャックだ！」

彼は、びつくりしたよりは、踊り上がったほど喜びました。そして、ジャックと原っぱで相撲を取りました。

「ジャック、どこにいたんだい。僕、晩に田舎へ帰るんだ、もうあえないのだけ。」

知らずに熱い涙が、目の中からわいて出ました。ジャックは、いったことがわかるのか、幸吉の涙にぬれた顔を舌でペロペロとなめています。

遠くで、ほかの犬のなき声がありました。すると、ジャックは、急に幸吉を振り捨て、あちらへ走って行ってしまいました。

## 五

がんこの叔父おじさんが、たいそう機嫌きげんがよくジャツクの頭あたまをなで  
 ています。そのそばに紫むらさきいろの長いながもとの着物きものをきたみつ子  
 さんが立たつて、見みて笑わらっていました。あちらで、拍子木ひょうしぎの音おとが  
 すると、年としちゃんや、正しょうちゃんが、  
 「紙芝居かみしばいのおじさんがきたよ。」と、駆かけ出だしていきました。  
 幸こう吉きちは、自分じぶんもいこうかと思おもつたとき、ふいにガタンと体からだが  
 揺ゆれたので、眠ねむりから覚さめたのです。彼かれは、田舎いなか行きゆの汽車きしゃに乗の  
 っつて、夢ゆめを見みていたのです。

昨夜さくや、叔父おじさんが、荷物にもつを持もつて、停てい車しゃ場じょうまで送おくつてくれ

ました。夜よが明あけると、汽車きしゃは、広ひろ々びろとした平野へいやの中なかを走はしつて  
 いました。車しゃ中ちゆうには、眠ねむそうな顔かおをした男おとこや女おんなが乗のつていま  
 した。窓まどから外そとを見ると、あたりの田圃たんぼや、雑木林ぞうきばやしは、まだ冬ふ  
ゆが枯れがのしたままであつて、すこしも春はるの気き分ぶんが漂ただよつていなかつた  
 のです。山やま々やまには、雪ゆきが真まつ白しろに光ひかつていました。汽車きしゃは、だ  
 んだんその山やまの方ほうに近ちかづいていきました。そして、ある駅えきへ着つい  
 たときに、幸吉こうきちは、いままで乗のつてきた汽車きしゃと別わかれて、ほかの  
きやくしや客車のへ乗のり換かえなければならなかつたのです。これから自分じぶん  
 を乗のせてゆく汽車きしゃは、もうちゃんとおちらで待まつていました。形かたち  
 が旧きゆう式しきで色いろも古ふるびていました。幸吉こうきちは、自分じぶんがだんだん都みやこ  
 から離はなれてゆくという、さびしい気きがしました。

その日の晩方、彼は、故郷の生まれた家へ帰ったのです。そして、幾年ぶりかで、お母さんのそばに床を敷いてもらって寝ることができました。夜中に目をさまして、小便に起きました。

彼は、戸を開けて戸口に出ると、青ざめた星晴れのした空は、忘れていた、なつかしい幼い日の物語語をしてくれますので、しばらくその昔語りにききとれて、じつと目をみはっている、と、遠くで、

「ウオー、ワン、ワン。」という犬のほえ声がしました。

「ジャックだ！」

幸吉は、こう叫んだものの、ジャックの声が、こんなところ

まできこえるはずのないことを悟さとりました。彼は、泣なきたいよう  
な気持きもちちがしました。ただ、あのとき、ジャックを助たすけてやって  
よかったと独ひとり心こころの中なかで満まん足ぞくして、また床とこへ入はいって眠ねむりました。

## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「花《はな》の咲《さ》く前《まえ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 花の咲く前

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>